

10 工芸、民芸品について

物には魂が宿ると考え、自らが製作した道具も他から交易によってもたらされた道具も、共に生あるものとして大切に取り扱いました。

使用に耐えなくなった道具は、祭壇で丁重な感謝や供物を添えて、その魂を神の国に送り返しました。日常生活に使用された道具類は、《ヤウンモシリ》（北海道）に植生する樹木の堅さや重さなど、その素材の特徴を活かして作られ、機能性が高く造形的な美しさも併せ持っています。

江戸時代の中頃には、和人にもアイヌ民族の工芸が知られ、江戸の文人が盛んにこれを求めました。海産物や毛皮類に加え、盆や杓子、茶托、糸巻などの木製品が産物として流通するようになりました。

明治時代には、国内外で博覧会が開催され、木彫品や樹皮衣なども出品されました。また、《ヤウンモシリ》（北海道）への交通網が発達すると、思い出や記念の品物として、土産品の需要がさらに高まりました。スイスで冬期間の農家の産物として作られていた小さなクマの彫刻が、八雲町に持ち帰られ複製されると、これが旭川をはじめ各地で生産され、《ヤウンモシリ》（北海道）の名産品として定着していきました。写真や印刷技術の普及とともに、アイヌ民族を写した絵葉書も販売されました。これにより、貴重な写真が残されたケースもありますが、いっばうで人目を引くように習慣を誇張したり歪曲した演出がされることも多く、誤解を生むことがあります。

昭和後期からは、《ヤウンモシリ》（北海道）という地域に根差した幅広い木彫工芸制作活動が始動し、民族的感性を表現した芸術作品が生まれ、室内や店内などの装飾用レリーフ、タペストリーの製作、様々な商品へのデザイン化などに、傑出した作家として活躍する人々も誕生しています。